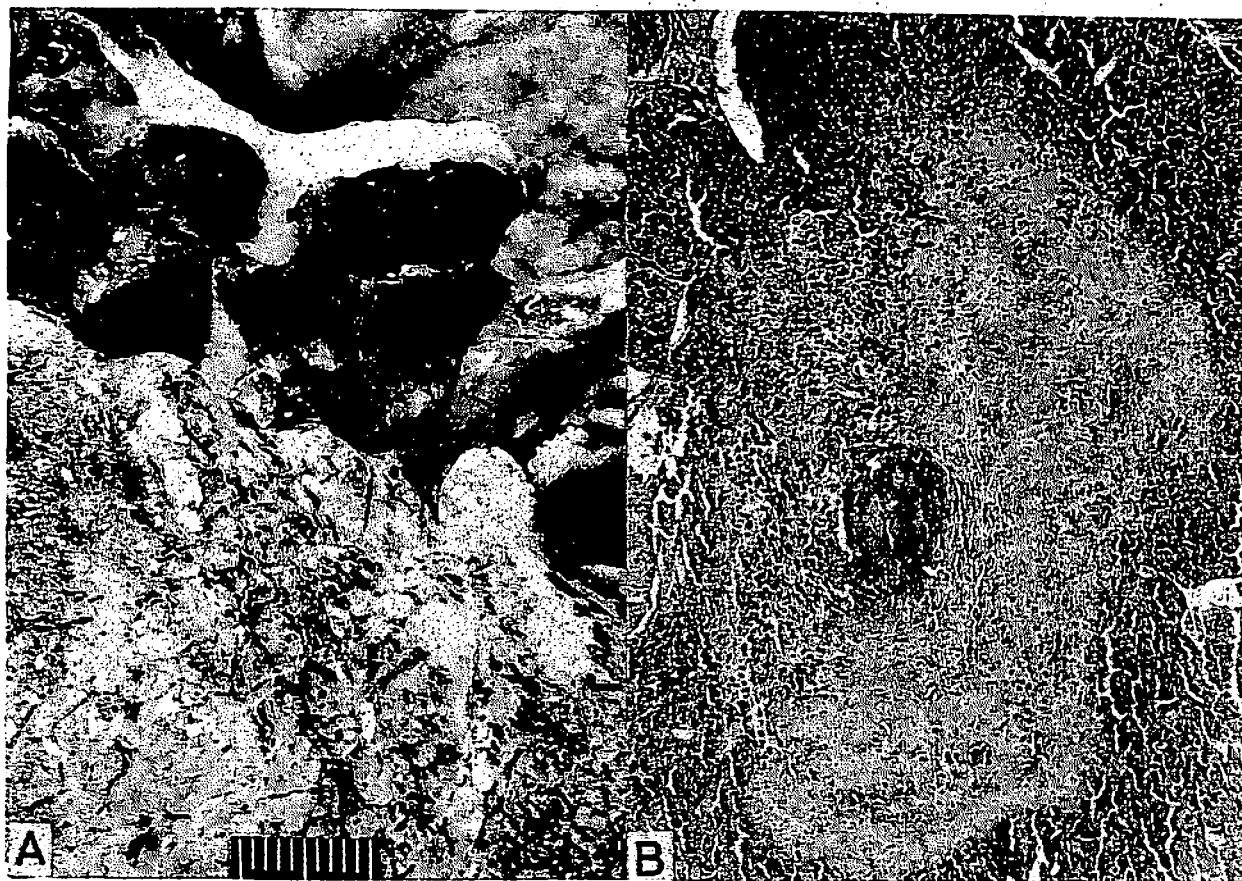


馬の肺門リンパ節

競走馬保健研究所研究三課 第14回獣医病理学研修会 No.208



症例は米国アパラシア山脈地方における炭坑馬12頭の解剖例中の1例(牡, 21才)で, 1日8ないし10時間, 週5ないし6日間, 15年間の期間, 炭坑内で採掘された石炭の運搬に供用された。剖検前3ヵ月間, 一般臨床検査で特に異常を認めなかった(オハイオ州立大家畜病院による)。

肉眼的所見: 肺門リンパ節(提出標本)は, 写真Aにみられるごとく黒色を呈し, 球状, 直径1ないし3cmでやや乾燥, 硬度を増していた。該リンパ節のほとんど全域において顕著な黒色素(炭鉱粉塵)沈着があった。リンパ節門部の結合織は増殖していた。剖面では黒色の髄質内に不整形をした1mm位の微小暗灰色点がかすかに見られた。肺には炭鉱粉塵沈着(1ないし2mmの黒色点)が散在, 特に肺門部(写真A)および肺辺縁部位で顕著で, 炭鉱粉塵は小葉間質に沈着し, 小葉構造が明瞭であった。一部の肺胸膜下リンパ管は拡張していた。

リンパ節の組織学的所見: 髄質全領域および一部の皮質洞部に炭粉沈着がみられ, 特にリンパ節門部で顕著であった。殆んど炭粉は組織球に貪食されていた。該炭粉貪食細胞はしばしば集簇をなし, 崩壊を示す貪食細胞には, 細網線維の増殖が伴った。また髄質には写真B(H-E染色, 50倍)のごとく, 直径200~500 μ mの

線維性結節病巣が散在した。結節病巣は細胞成分に乏しく, 主として膠原線維より成っていた。病巣辺縁は比較的限界明瞭であったが一部の辺縁より増殖した膠原線維が索状かつ放射線状をなし, 隣接する髄質に突出し, 稀に髄質洞部に或いは髄索までおよんだ。また辺縁における膠原線維はしばしば細網線維との移行像を示した。病巣内部の膠原線維は部分的に硝子様化を示し, 或る結節病巣の中心部では石灰化がみられた。又, 他の結節病巣内の膠原線維は同心円状に走行する構造を示した。上述した線維性結節の中心部, 辺縁および周縁には炭粉沈着が顕著であった。炭粉には, 偏光フィルターで複屈折する多数の微細物質の含有が判明した。該微細物質はX線回折(オハイオ州立大獣医・病理)により, シリカ(SiO_2)であった。珪酸物質による線維性結節形成の病理発生はいまだ不明の点が少ない。該リンパ節の成り立ちの過程には線維素細胞の関与が乏しく, 次のごとく考えられた。①珪酸を含む炭粉貪食細胞の集簇→②貪食細胞の崩壊→③幼若な細網線維成生→④膠原線維化→膠原線維の部分的硝子様化および結節中心部の石灰化。

組織学的診断: 炭粉-珪酸沈着による馬リンパ節の結節性線維症(なお研修会の席上で壊死性変化との意見もあり)。